

○日本のゴマノハグサ科植物数種の学名変更 (山崎 敬) Takasi YAMAZAKI:  
Nomenclatural changes and new taxa of some Scrophulariaceous plants in  
Japan

「日本の野生植物」(平凡社)の解説をした際いくつかの植物の学名を変更したので、  
ここで正式に記述しておくと共に、同書とは関係ない一部の学名も変更しておく。

1) **Veronicastrum sachalinense** (Borissova) Yamazaki, comb. nov.

*Veronica sachalinensis* Borissova in Fl. U. S. S. R. 22: 496, f. 23-3 (1955)—  
*Veronicastrum sibiricum* (L.) Pennell var. *yezoense* Hara in Journ. Jap. Bot.  
16: 161 (1940).

Distr. Hokkaido and Sachalien.

エゾクガイソウはクガイソウと共にシベリアクガイソウの変種として扱われている  
が、丈が高く、葉は大きく、花も大きくて花冠裂片の先は円形か鈍形である。花序は細  
長く、先が尾状にとがり、長さ 20~40 cm になって本州のクガイソウに較べると壮大で  
あるが、これはシベリアクガイソウにも見られる。ただ後者は花序軸は無毛であり、花  
冠裂片の先はとがる。クガイソウはツクシクガイソウをとうしてシベリアクガイソウと  
漸次連絡するが、エゾクガイソウは樺太・北海道に分布が限定され、シベリアクガイ  
ソウともクガイソウとも明らかに異なるので、変種程度のものであるより、分化の程度は  
弱いけれど、独立した種として扱いたい。

2) **Euphrasia pectinata** Ten. var. **obtusiserrata** (Yamazaki) Yamazaki,  
comb. nov.

*Euphrasia tatarica* Fisch. var. *obtusiserrata* Yamazaki in Act. Phytotax.  
Geobot. 19: 168 (1963).

エゾノダツタンコゴメグサは *E. tatarica* の変種と考えられるが、後者は Fl. Europ.  
3: 263 (1972) で *E. pectinata* の異名とされている。この当否を確かめることは困難  
であるが、ヨーロッパでの研究を尊重して学名の組換えを行う。

3) **Scrophularia grayana** Maxim. var. **grayanoides** (Kikuchi) Yamazaki,  
comb. et stat. nov.

*Scrophularia grayanoides* Kikuchi in Mem. Nat. Sci. Mus. Tokyo 1: 69  
(1968).

Distr. Honshu, Pref. Miyagi and Iwate.

ハマヒナノウスツボは岩手県から宮城県北部の海岸に分布する。エゾヒナノウスツボ  
に較べると全体が小さく、茎の翼も著しくない。種類として報告されたが、区別しうる  
特徴は量的な形質なので、エゾヒナノウスツボの変種として扱いたい。

4) **Mazus miquelii** Makino f. **contractus** (Makino) Sugimoto, Key to Herb.  
Pl. Japan, rev. ed. 1: 519 (1978).

*Mazus miquelii* Makino var. *contractus* Makino in Bot. Mag. Tokyo 16: 162 (1902).

ジャカゴソウはサギゴケの園芸品で江戸時代から栽培され、ごくまれに現在でも見られる。学名は変種として書かれているので、「日本の野生植物」では品種に組み変えたが、杉本順一氏がすでに品種にしていることがわかったのでその学名を正式に採用したい。サギゴケの和名を白花品にあて、普通品はムラサキサギゴケという名で呼ぶことがあるが、野外で白花品を見ることはめずらしく、普通品をさしおいて白花品を名づけるのは不自然である。名の由来について古い文献が見つかればと思っているけれどもなかなか見つからない。大槻文彦の大意海はサギソウとサギゴケを混同しているようなので問題にならない。飯沼慾齋は普通品にサギゴケの名を使っている。サギゴケの花の上唇のそり反った感じが、けばだったサギの頭部を思わせるのでいうのでないかと考えている。白色にこだわってムラサキサギゴケとわざわざ呼ばなくてもよいのでないかと思う。

5) *Centranthera cochinchinensis* Lour. subsp. *lutea* (Hara) Yamazaki, stat. nov.

*Razumovia cochinchinensis* (Lour.) Merr. var. *lutea* Hara in Journ. Jap. Bot. 17: 397 (1941)—*Centranthera cochinchinensis* (Lour.) Merr. var. *lutea* (Hara) Hara, Enum. Sperm. Jap. 1: 246 (1948)—*Centranthera chevalieri* Bonati in Bull. Soc. Bot. France 24: 1099 (1942); Yamazaki in Journ. Jap. Bot. 55: 10 (1980).

ゴマクサの学名として *C. cochinchinensis* が用いられるが、これは紅色の花をもつ種類で、日本のゴマクサとは異なるものであることはすでに原 寛氏が報告しているし、私も本誌55巻で種類として区別する場合には *C. chevalieri* が使われることを述べた。紅花種は花が大きく黄色の色素の他に紅色の色素があり、ベトナム、タイからマレーシアに分布する。黄色種は花が小さく黄色の色素のみで、ベトナム、タイ北部から中国、日本に分布する。分布は異なるけれど非常に近いもので、標本では花がないと区別することは困難である。正確には現地でも産品を調査しなければならないが、花の大きさや色素以外に区別は見いだせないで、同一種の地理的変異として扱うのが妥当だと思う。

6) *Mimulus nepalensis* Benth., Scroph. Ind. 29 (1835); in DC., Prodr. 10: 373 (1846).

*Mimulus nepalensis* Benth. var. *japonica* Miq. in Ann. Mus. Lugd.-Bat. 2: 116 (1865); Yamazaki in Journ. Jap. Bot. 37: 267 (1962), syn. nov.—*Mimulus tenellus* Bunge var. *nepalensis* (Benth.) Tsoong in Fl. Reip. Pop. Sinicae 67(2): 171 (1979), syn. nov.

ミゾホオズキについては本誌37巻においてヒマラヤのものと比較し、がくの縁に明らかかな毛が散生する点で異なるとして変種名を使用した。その後多くの標本を見るに及

んで、個体による問題で、変種として区別するほどの地域性もはっきりしないので、同一のものとする方がよいと考えるに致った。

本種を朝鮮、中国北部の *M. tenellus* Bunge と同一種とする見解をしばしば見うけるが、後者は明らかに別種である。その区別については先にも述べたのでここに繰り返さない。

7) *Limnophila indica* (L.) Druce, Rep. Bot. Exch. Club Brit. Isl. 3: 420 (1914), not seen; Merrill in Philipp. Journ. Sci. Bot. 9: 140 (1914).

*Ambulia trichophylla* Komarov in Act. Hort. Pétrop. 13: 429 (1901)—*Limnophila trichophylla* (Kom.) Komarov, Fl. Manch. 3: 421, tab. 5, 1-4 (1907); Yamazaki in Journ. Jap. Bot. 43: 504 (1968).

コキクモは先にヒマラヤの *L. indica* の標本と比較して別種であるとした(本誌43巻)。最近インドシナ半島の多数の標本を見る機会があり、コキクモは *L. indica* の変異の中に入るものであることが明らかになった。ただ、日本、中国のコキクモはがく筒の基部にある小包葉が小さくて殆んど目立たないのに、熱帯の *L. indica* は明らかな小包葉がある点で異なっている。日本や中国のコキクモはキクモほど多くあるものでなく、ごくまれに発見される程度で、まとまりのある一つの集団として見られるよりは、たまたま分布してきて生育しているといった状態で、分布の北の限界にあたり、充分發育しえないことによる形の変化かと思われる。従来のように同一種として扱うのがよいと考える。

8) *Pedicularis chamissonis* Steven var. *longirostrata* Yamazaki, var. nov.

Tubi corollarum albescentes, galeis purpuraceis longi-rostratis, rostris 5-7 mm longis.

Hab. Honshu, Pref. Yamanashi, Kitadake, Ryomata, alt. 2600 m (T. Yamazaki, July 9, 1954, type in TI).

ヨツバシオガマは種類としてはアリューシャン列島から本州中部まで分布している。アリューシャン列島、カムチャツカのもは、花冠上唇の先はあまり長くなく、細くとがる部分の長さはせいぜい 2 mm ほどである。北千島まではこの形である。南千島から北海道のものでは花冠上唇の先は細く伸びてきて、細くとがる部分は長さが 3-4 mm となる。これとほぼ同じ形が東北地方全体から中部地方の日本海側を白山まで分布している。これがヨツバシオガマ var. *japonica* である。北アルプス、中央アルプス、南アルプスのものは、花冠上唇の上側にくびれができ、そこから先が急に細くなって長さ 5-7 mm の細長いくちばしができる。これをクチバシヨツバシオガマと名づける。ヨツバシオガマは花冠全体が紅紫色であるが、クチバシヨツバシオガマは花筒から下唇にかけて白味が強く、上唇のみが紅紫色である。

谷川岳や白馬岳では両者が見られる。両者が混在しているのでなく集団によって異

なる傾向があり、両者が中間形で連絡するといったものではないようである。中部地方では大体日本海側にヨツバシオガマが、より南にクチバシヨツバシオガマが分布する傾向がある。しかし、八ヶ岳や北岳にもヨツバシオガマが見られるから地域ではっきり異なるわけでもない。このことは八ヶ岳にウルップソウがあり、北岳にキンロバイがあることなどと類似した最新氷河期に関する現象かもしれない。

(東京大学理学部付属植物園)

### ○タイワンマツタケについて (小林義雄) Yosio KOBAYASI: On *Tricholoma formosana* Sawada

本年(1982)秋に日台合同で台湾菌類調査を行うについて、その打ち合わせのため4月に台湾へ赴いた。その際に台湾大学植物系の陳瑞青教授と談偶々タイワンマツタケのことに及び、数年前に玉山(新高山)の八通関で採ったタイワンマツタケの液浸標本を恵与された。帰国早々これを鏡検した結果、新しい事実が見出されたのでここに記すことにした。

同輩は沢田兼吉氏が台湾菌類調査報告の5報(1931)に図入りで発表した。採集地は八通関のニイタカアカマツ林である。日本のマツタケに比べて氏が挙げた著しい相異点は担子基に普通は2本の担子梗があること(稀に4本)、胞子に油球が多く、担子器は長形(40-50 $\mu$ )、傘の表面の鱗片は一層軟質で淡色である点である。

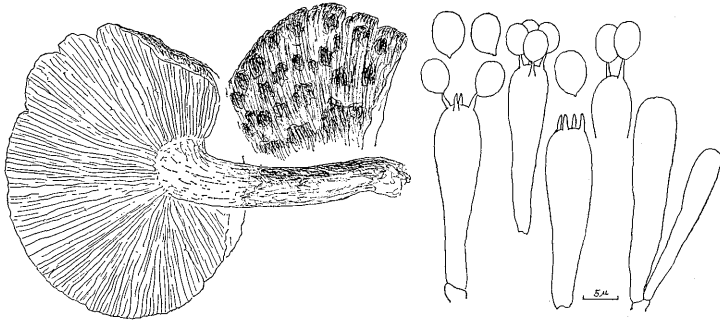


図1. タイワンマツタケの子実体(×1/3)及び担子器と胞子。

さて、私が液浸標本で観察した結果、傘表の鱗片、担子器の長さ(30-35 $\mu$ )、胞子(6-7×5 $\mu$ )などに差異は認められなかった。日本産のマツタケでも採りたては淡色である。また担子梗は大部分4本で、僅に2本のものも見出せる程度であった。よってこの標本で観察した限りでは台湾産を変種として区別する必要はないと思われた。しかし正確を期するためには、日本産のものにつき2本の梗を有するものが混って居らぬかをしらべ、台湾産の生品について委しい生態と形態的研究を進める必要がある。

(国立科学博物館)